

接辞の用法とポライトネス

李奇楠（北京大学）

要 旨

日本語には接辞の用法が多数ある。発話におけるその接辞の使用は、ポライトネス・ストラテジーによって応用されるケースが本考察を通して見つかった。本論文は接辞の二分類である接頭辞と接尾辞の用法を、丁寧さの原理やポライトネス理論の立場からその配慮表現の実態にかんする分析を試みた。接辞のポライトネス的機能を果たしていることが論証できているだけでなく、日本語の接辞的配慮表現の使用分析によって、丁寧さの原理とポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・ポライトネスとの有機的結びつきが実現できた。言語現象と言語理論との融合がコンテキストにおける接辞の具体的使用例についての研究でその相互論証・相互深化に達せられる言語研究の醍醐味が味わえ、新しい境地が切り開けたといえる。

キーワード: 接辞、接頭辞、接尾辞、配慮、ポライトネス

1. はじめに

ことばはコミュニケーション上もっとも有力な武器の一つであり、有効なツールだとと言えるのは、論を俟たないであろう。ことばはまた、諸刃（もろは）の剣（つるぎ）でもある。人を笑わせたり人を泣かせたりするほどのパワーを持っている。

配慮表現はことばの危害の側面を防げるため、つまりことばによって人（の心）を傷つける可能性を無くすあるいは最小限にとどめるための存在だと認識できる。

本論文は配慮表現の一種類である接辞の用法とポライトネスとの関係を論じる。配慮表現の形態特徴は、語や文のレベルからふつう考えられるが、形態素である接辞の用法も配慮表現のカテゴリーに入ると言える。

2. 接辞について

接辞は、膠着語の日本語にとって、欠かせない存在であり、よく使われている品詞の一種である。松下大三郎の『改選標準日本語文法』によると、接辞は接頭辞と接尾辞に分かれ、接頭辞には「初ハツ、新ニヒ、小サ、小ヲ、深ミ、真マ」、接尾辞には「めく、ぶる、さぶ、さ、み、ら」などがある。奥津（1982：283）には以下の論述がある。

形態素とは自立性の有無によって自由形式（free form）と付属形式（bound form）とに分けられる。前者は形態素であると同時に語でもあるので単純語などと呼ばれる。また付属形式を従えて語形成をなす場合は語根（root）と呼ばれる。付属形式が付くものになるものを一般に語幹（stem）と呼べば、語根は最小の語幹ということになる。付属形式とはいわゆる接辞（affix）で、語幹に付く位置によって3分される。語頭に付くものは接頭辞（prefix）、語尾に付くものは接尾辞（suffix）、語幹を分割してその中に割りこんでくるものを接中辞（infix）という。この中で接中辞は日本語には見られない。接頭辞もあまり見られず⁽¹⁾、日本語における南方要素の残存かとも言われる

が、「サ夜」「ミ空」「タヤスイ」「カ細い」など、特定の意味を持たず、語調を整えることを主たる機能とするとされる。もっともこれら接頭辞によって多少意味のちがいが出て来るものもあるが、いずれにしても生産力を失った接辞である。……接頭辞が同時に接尾辞として用いられるということは珍しいことである。(奥津 1982 : 283)

上記の奥津 (1982 : 283) によると、「接頭辞もあまり見られず」「接頭辞が同時に接尾辞として用いられるということは珍しいことである」と書いてあるが、今回の考察を通して、接頭辞が「あまり見られず」ではなく、よく見られるようになり、接頭辞が同時に接尾辞として用いられるということはまだ数が少ないかもしれないが、それほど珍しいことでもなくなっているようである。

村木 (1993 : 100) には以下のように、接辞に生産性の高いものと低いものがあると指摘している。

合成語をつくる要素としての接辞には、生産性の高いものと低いものがある。現代語の生産的な接辞としては、以下に示すように和語よりはむしろ漢語のほうが多い。

「お - 菓子」; 「うれし - さ」「うれし - がる」「山田 - さん」

「新 - 人類」「前 - 会長」「未 - 解決」「不 - 自然」「非 - 公開」「御 - 連絡」;

「参考 - 人」「教育 - 者」「社会 - 性」「交通 - 費」「都会 - 的」「空間 - 上」

洋語の中にも、「アンチ巨人」「ウルトラ右翼」「乙女チック」「ゆっくりズム<ゆっくりに+イズム」のような接頭辞や接尾辞としての用法が次第に造語力をたかめている。和語の「か - 」(か細い), 「け - 」(け高い) のような接頭辞や「- めく」(春めく, 秋めく), 「- ばむ」(黄ばむ, 汗ばむ) のような接尾辞は現代語ではもはや生産的でない。村木 (1993 : 100)

秋元 (2002 : 92-94) には、接頭辞と接尾辞に関する品詞性分類、具体的語例を取り上げている。

接頭辞には、①形容詞性 (大通り、新世紀) ②待遇性 (お祝い、御馳走) ③否定性 (無意識、非課税、アンチファシズム) ④漢語性 (超高層、反体制) ⑤副詞性 (か細い、ものがなしい)

接尾辞には、①名詞性 (待遇表示の田中さん、山田先生、吉岡君や複数表示の僕ら、わたくしどもや助数詞表示の六本、六個) ②動詞性 (ほしがる、おとなぶる) ③形容詞性 (茶色い、子供っぽい、恩着せがましい) ④形容動詞性 (道徳的、はなやか) ⑤副詞性 (立場上)

さらに、接尾辞による品詞性の変更の分類についても言及している。①名詞をつくるもの (重さ、ねむけ、柔軟性) ②動詞をつくるもの (いやがる、大人ぶる、春めく) ③形容詞をつくるもの (あきっぽい、男らしい) ④形容動詞をつくるもの (うれしげ、イデオロギー的) ⑤副詞をつくるもの (事実上、社長然) 秋元 (2002 : 92-94)

発表者の収集した用例からみると、接辞用法に関しては以下 (a) ~ (f) のような6つの現状特徴が言える。

(a) 古典的接辞と新出的接辞の併存使用

(b) 接頭辞が接尾辞より数少ないと言われているが、いまは実際、接頭辞のほうもよく見られる。

(c) 二重接頭辞、二重接尾辞の使用

(超早指さし、新型コロナウイルス、ストレスたまり放題、テンション爆上がり、イクメンぶり、…)

(d) 接頭辞「お」「ご」+Vマス形（漢語動詞語幹）+ください（いただく）の構文パターン

（ご遠慮ください ご視聴いただけません）

(e) 慣習的配慮表現における「お」「ご」の使用

（おことばに甘えて おことばを返すようですが）

(f) 生まれつきの意味的にポジティブ・ポライトネス表現となる接辞（好青年、大好き）

3. ポライトネス関連の諸理論

本論文のポライトネスは、Leech (1983)、B&L (1987) の語用論的定義づけおよび関連の原理に基づいて考える。ポライトネス表現は、和語の日本語で言うと、配慮表現のことになる。配慮表現の定義づけは、山岡 (2019) などを参照している。

Leech (1983;1987 邦訳: 190、191) の丁寧さの原理については、以下諸原則しかも対をなしている6つの原則からなっている。

(I) 気配りの原則（行為賦課型と行為拘束型において）

(a) 他者に対する負担を最小限にせよ。

(b) 他者に対する利益を最大限にせよ。

(II) 寛大性の原則（行為賦課型と行為拘束型において）

(a) 自己に対する利益を最小限にせよ。

(b) 自己に対する負担を最大限にせよ。

(III) 是認の原則（表出型と断定型において）

(a) 他者の非難を最小限にせよ。

(b) 他者の賞賛を最大限にせよ。

(IV) 謙遜の原則（表出型と断定型において）

(a) 自己の賞賛を最小限にせよ。

(b) 自己の非難を最大限にせよ。

(V) 合意の原則（断定型について）

(a) 自己と他者との意見の相違を最小限にせよ。

(b) 自己と他者との合意を最大限にせよ。

(VI) 共感の原則（断定型について）

(a) 自己と他者との反感を最小限にせよ。

(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ。(Leech1983;1987 邦訳: 190、191)

B&L (1987) では、ポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・ポライトネスおよびそれぞれのストラテジーについて詳しい論述があり、ここではその主な論点を、本論文第四章の具体的論考の理論的裏付けとして、以下のように引用しておく。

3.1. ポジティブ・ポライトネス

ポジティブ・ポライトネスとは、相手のポジティブ・フェイスに向けられた補償行為を指し、聞き手の永続的な欲求（欲求から出た行為、その結果手に入れた物や評価）が常に望ましいものであると認められたい、という願望に沿うものである。同様の欲求（またはその一部）がこちらにもあることを伝えることにより、相手のそうした願望を満たす、といった行為などがそれに当たる。

ネガティブ・ポライトネスと異なり、ポジティブ・ポライトネスは、必ずしも常にFTAにより侵害されるフェイスの補償であるというわけではない。つまり、ネガティブ・ポライトネスにおいては、補償行為は相手に与える負荷自体を対象とするのに対し、ポジティブ・ポライトネスにおける補償には、一般的に他者の欲求を認めたり、自・他の欲求の類似性に言及したり、といった行為も含まれる。図3 (p.136) に示されるように、ポジティブ・ポライトネスとは実際には、多くの点で、単に親しい者同士の通常の言語的行為を指しているとも言える。例えば、互いの人格に対し興味を持って賞賛し合ったり、互いの欲求や知識が共通しているという仮定のもとにやりとりしたり、相互に義理を尽くし互いの欲求を反映することをそれとなく伝える、というようなことは日常的に行われる。おそらくポジティブ・ポライトネスとこれら日常の親密な言語行為を区別する唯一の特徴は、誇張という要素であろう。たとえSが心から、「あなたの欲するものを欲する」(I want your wants) とは言えないとしても、少なくとも「あなたのポジティブ・ポライトネスが満たされることを望む」(I want your positive face to be satisfied) という誠意を表すことは可能であり、誇張はポジティブ・ポライトネス表現のフェイス補償的側面を指し示す1つのマーカーとなる。例えば、以下のような会話において、相手に対する賞賛や興味を示すために用いられる誇張表現にはある種の不誠実さがつきまとうが（「まあ、なんて見事なバラでしょう！素晴らしいの一言ですわ、Bさんの奥様。一体全体どうやったらそんなふうに完璧にバラの世話ができるのか、まったく想像もつきません！（How absolutely marvelous! I simply can't imagine how you manage to keep your roses so exquisite, Mrs B!））、これは話し手の、本当に心から相手のポジティブ・ポライトネスを高めたいという含意によるものであるゆえ、良しとされるわけである。

まさにこのような親密な関係における言語使用との関連こそが、ポジティブ・ポライトネスに言語上の補償力をもたらすのである。ポジティブ・ポライトネスの発話は、親密さを表す一種の比喩的拡張として使用され、例えば、限定的には初対面の相手であっても互いに似ている者同士と見なし、会話の目的のため共通の基盤や欲求を持っているかのように話すということもある。同様の理由で、ポジティブ・ポライトネスの技術はFTAの補償としてだけでなく、もっと一般的に、一種の社会的促進剤として使用可能であり、Sはそれを使うことにより、Hはもっとちかづきたい、という意思を示すことができる。

(B&L 1987、邦訳 2011 : 134-136)

図3 ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー

1. H (の興味、欲求、ニーズ、持ち物) に気づき、注意を向けよ (Notice, attend to H (his interests, wants, needs, goods))
2. (H への興味、賛意、共感を) 誇張せよ (Exaggerate (interests, interests, approval, sympathy with H))
3. H への関心を協調せよ (Intensify interests to H)
4. 仲間うちであることを示す指標を用いよ (Use in-group identity markers)
5. 一致を求めよ (seek agreement)
6. 不一致を避けよ (Avoid disagreement)
7. 共通基盤を想定、喚起、主張せよ (Presuppose/raise/assert common ground)
8. 冗談を言え (Joke)
9. S は H の欲求を承知し気遣っていると主張せよ、もしくは、それを前提とせよ (Assert or presuppose S's knowledge of and concern for H's wants)
10. 申し出よ、約束せよ (Offer, promise)
11. 楽観的であれ (Be optimistic)
12. S と H 両者を行動に含めよ (Include both S and H in the activity)
13. 理由を述べよ (もしくは尋ねよ) (Give (or ask for) reasons)
14. 相互性を想定せよ、もしくは主張せよ (Assume or assert reciprocity)
15. H に贈り物をせよ (品物、共感、理解、協力) (Give gifts to H (goods, sympathy, understanding cooperation))

(B&L1987、邦訳 2011 : 136 による)

3.2. ネガティブ・ポライトネス

ネガティブ・ポライトネスとは、相手の「ネガティブ・フェイス」、つまり、自由な行動や興味を妨げたり邪魔されたくないという欲求に向けられる補償的行為である。ポジティブ・ポライトネスが「親しみを表したり」(familiar)「冗談を言ったりする」(joking) ような行動の核であるのに対し、これは敬意行動の中核 となるものである。ネガティブ・ポライトネスは、Durkheim による「消極的儀礼」(negative rites) [訳注：聖なるものをその聖性が汚されないように俗なるものから分離する儀礼。*3.5 参照]、つまり忌避という慣習的行為にする。ポジティブ・ポライトネスは広範囲に用いられるが、ネガティブ・ポライトネスの使用は特定範囲に限られ、FTA が相手に与えるに違いないと見られる負担を軽減する働きをする。西洋文化の中でポライトネスを考える時、まず頭に浮かぶのはネガティブ・ポライトネスである。我々の文化では、ネガティブ・ポライトネスが FTA の言語的補償として最も精緻で慣習化したものとなっており、(ポジティブ・ポライトネスも幾分かの関心を集めているとはいえ 34) ネガティブ・ポライトネスは諸々のエチケット本の主要部分を占めるに至っている。ネガティブ・ポライトネスと見られる言語現象、例えば、様々な慣習的間接表現 (conventional indirectnesses)、発語内の効力をぼかすなどのヘッジ表現 (hedge)、(依頼などを行う際、それが成功する見込みについて) 悲観的立場をとることでポライトネスを表すこと

(polite pessimism) [訳注：例えば「お忙しくてご無理だとは思いますが、、、」などがそれに当たると考えられる]、Hの持つ相対的な力を強調することなどは、大変馴染みのあるものであり、あえて紹介するまでもないだろう。

しかしながら、話し手がネガティブ・ポライトネスに典型的な言語現象を用いる動機は、図4 (p. 180) に示す欲求のみではないことを強調しておくべきであろう。これらの現象はすべて（ちょうど、ポジティブ・ポライトネス現象が、社会的距離を縮めるための表現形式であると考えられるように）社会的な「距離をとる」(distancing) ために一般に有効な言語形式なのである。そのため、話し手がそのやりとりの進行に何らかの社会的抑制をかけたいと思う時に、これらが用いられることがよくあると考えられる。

(B&L1987、邦訳 2011 : 178－179)

図4 ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー

1. 慣習に基づき間接的であれ (Be conventionally indirect)
2. 質問せよ、ヘッジを用いよ (Question, hedge)
3. 悲観的であれ (Be pessimistic)
4. 負担 RX を最小限せよ (Minimize the imposition, Rx)
5. 敬意を示せ (Give deference)
6. 謝罪せよ (apologize)
7. S と H を非人称化せよ：人称代名詞「私」「あなた」を避けよ (Impersonalize S and H: Avoid the pronouns 'I' and 'you')
8. FTA を一般的規則として述べよ (State the FTA as a general rule)
9. 名詞化せよ (Nominalize)
10. 自分が借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを、オン・レコードで表せ (Go on record as incurring a debt, or as not incurring H)

(B&L1987、邦訳 2011 : 180 による)

4. 接辞用法とポライトネス

4では、4.1と4.2の二節に分かれ、接辞における二分類の接尾辞（たとえば「～三昧」）と接頭辞（たとえば「大～～」）の別に、その接辞の用法とポライトネスとの関係を考察する。

4.1. 接尾辞の使用とポライトネス

2で考察した通り、日本語には接辞の用法が多い。新しい外来語の接辞用法だけでなく二重三重のような接辞用法も現れている。意味的にポライトネスや非配慮的なものもあるし、接辞（がつく語）それ自体は発話に入らないと、無色透明な中立的用法もかなりある（ほとんどであろう）。この4.1では、まず接辞における接尾辞の使用とポライトネスの関係を考察・分析する。

- (1) HIDE 「またっだけまたしたファンの人たちには えい ほんと申し訳ないと思

います。えー 我儘三昧（わがままざんまい）やってまいりましたが、えー 最後のわがまま ごめんなさい。そして、ありがとうございます。」(XJAPAN (1997) 解散記者会見にて)

(1) のなかには、「三昧」の接尾辞が使われている。発話者 HIDE が日本一のロックバンド XJAPAN のメンバーとして、1997 年のバンド解散の記者会見で、ファンの人たちに向かって、お詫びと感謝のコメントを発表するとき、「我儘三昧（わがままざんまい）やってまいりましたが」と話した。「わがままざんまい」は自己への非難を最大限にする自己非難（自賛抑制）の配慮機能を表す配慮表現であろう⁽²⁾。つまり、HIDE の発話の中に用いられている接尾辞「三昧」は、自分自身への非難の強調を通して、ファンへのお詫び・感謝の意を最大限に表そうとしている心優しい配慮表現だと言えるであろう。「わがまま」ができる相手はふつう、家族など身内の人間や親しい間柄の友人同士などに限られているので、HIDE の「わがままざんまい」の発話は、謝罪のネガティブ・ポライトネスの大枠におけるポジティブ・ポライトネスの意識的応用だと判断できる。

(2) 「カラオケで歌いまくった」との声があがった、この夏歌。(Music Station20200724)
上記 (2) の「歌いまくった」はカラオケでよく歌った夏うたへの評価である。これより上の評価がないかもしれない。その歌がどれほど好きか、その「歌いまくった」の接尾辞「(V マス形+) まくった」の用法でよく説明できたと言えるであろう。3 のポライトネス理論から考えると、「カラオケで歌いまくった」の表現は、Leech (1983) の丁寧さの原理の (Ⅲ) 是認の原則（表出型について）の「(b) 他者の賞賛を最大限にせよ」と合致している。また、B&L (1987) のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの「2 (H への興味・賛意・共感を) 誇張せよ」とも一致している。よって、(2) の「歌いまくった」は賞賛、絶賛としてのポジティブ・ポライトネス表現だと説明できる。

(3) きょう 14 日（金）も東日本や西日本を中心に猛烈な暑さが続く。体温以上の暑さになる所があるため、熱中症には警戒が必要だ。一方、北日本の天気は下り坂で、午後は日本海側から雨の範囲が広がる見通し

(<https://news.yahoo.co.jp/articles/dfd7d9251e3e751497d249adbe38310fb117b650>)

上記 (3) に用いられている「体温以上」の接尾辞「～～以上」や「暑さ」の「～～さ」は、本来は数字や性質に関する客観的描写であるが、ここの発話 (3) に入ると、発話機能である呼びかけ（忠告や注意とも言えるが、読者に気を付けてもらうための働きかけ・策動・指令行為範疇に入る）の形態（コード化）たる形容詞述語文である「～～警戒が必要だ」に使われると、全体のその発話機能に貢献する構成成分となり、読者のためになる情報提供なので、ポジティブ・ポライトネス表現（の一部）と言える。

4.2. 接頭辞の使用とポライトネス

4.1 に続き、この 4.2 では接辞における接頭辞の使用とポライトネスとの関係を考察し、分析する。

(4) お笑いタレントの木村祐一 (57) が 25 日、読売テレビ「特盛！よしもと 今田・八光のおしゃべりジャングル」(土曜・前 11 時 55 分) で、18 日に急死した俳優の三浦春馬さん (享年 30) に触れ「2 本ほど (共演した)。みなさんが言うよう

に、超がつく好青年でしかない。めっちゃめっちゃええ子」と思い出を語った。

(<https://news.yahoo.co.jp/articles/baacb64b1bd0fb1e8d282e60df60c6d2e1700a8c>)

(4)のお笑いタレントの木村祐一氏(57)による急死した俳優の三浦春馬さん(享年30)についての思い出の発話では「超がつく好青年」の高い評価語が使われている。「超好青年」の「超」+「好青年」の二重接辞構造、すなわち「超」と「好」二つの接頭辞が中心語の名詞「青年」を限定修飾している。話し手木村祐一氏(57)より青年三浦春馬さん(30)への絶賛であり、ポジティブ・ポライトネス表現である。

(5)「小学生の頃(とき)からずっと大好きで」(Music Station20200724)

(5)は23歳の保育士(女性)が好きな夏の歌についての回答。接頭辞の用法「大好き」をもって話し手の評価を表していて、好きな夏の歌特にその歌手、歌の作詞・作曲者にかんするポジティブ・ポライトネス表現だと言えるであろう。

(6)「プチ贅沢しませんか」

(日本の某スーパーの肉売り場の貼り紙に書いたことば 20200803)

(6)のフレーズから肉屋さんの優しい配慮が感じられる。お客さんに買ってほしいが、露骨的には言えない。アドバイスの口調で、しかもお客さんの立場に立って、あまりお金がかからない提案、呼びかけをしている。ここで接頭語「プチ」使用の役割が大きいと言える。(6)の発話全体が疑問文の形をとっていて、消費者の財布のプライベート的経済状況を心配る市場側のスーパーの肉売り場の経営者側よりのネガティブ・ポライトネス表現となっている。疑問構文のステレオタイプの形態パターンと、創意工夫に満ちた斬新フレーズ、とりわけ接頭辞「プチ」が取り入れられる「プチ贅沢」との共起使用は見事なポライトネス表現だと讃嘆するしかないであろう。すてきなネガティブ・ポライトネスの配慮表現だと思う。

(7)「で、部長はどうお考えですか?」(『半沢直樹2』第一回)

(7)の発話には「お+Vマス形+です」構文が使われている。年上あるいは社会地位的に上の方に向かって、相手が考えていること(心の中で意図していること)を聴く場合、接頭辞の使用で、具体的に言うと、「接頭辞お・+Vマス形」で、相手の心理的領域への侵入(こちらも中立的意味あいの用法)を避けられないが、話し手が慎重に言葉を取捨選択し、相手の邪魔されたくないネガティブ・フェイスへの配慮より生じた日本語らしい用法パターンだと言えるであろう。3で述べたように、B&L(1987)のネガティブ・ポライトネスの戦略として、「9. 名詞化せよ(Nominalize)」の策略があり、この(7)の動詞構文ではなく、名詞構文を使用することも、日本語の配慮表現現象に同じ原理で説明できることになっているであろう。逆にいうと、B&L(1987)のポライトネス理論の普遍性がさらに証明できたと言えるであろう。

(8)深山(みやま)先生「こづくえ 論文を読み込むくせは悪いことじゃない。だけど、それだけじゃ得られないものもあるんだよ」小机(こづくえ)幸子「お言葉を返すようですが、わたしの唯一の強みはざがくです。それをベースにやっていきたいと思います。脳外科医として」

(「トップナイフー天才脳外科医の条件」第8話)

(8)の発話者深山は脳外科医、女性、権威的存在であり、その聞き手兼発話者である小

机は若い新人脳外科医、女性、深山の部下に当たる人物である。小机の「お言葉を返すようですが」は相手（上司）の発話を反論するばあい、切り出す配慮的発話としてよく使われる。このとき、「お言葉」が用いられ、反論しようとする相手の発話を指すポライトネス的発話と認識できる。その中の接辞つまり接頭辞「お」の付加は義務的であり、「お」はこの決まり文句のような「お言葉を返すようですが」⁽³⁾では欠かせない存在である。この接頭辞「お」の役割はこの反論の配慮表現として果たす役割が大であり、ネガティブ・ポライトネス表現のカギでもある。

(9) 「じゃ、おことばに甘えて」(『銀魂 2』)

(9) の発話「おことばに甘えて」は、(8) の発話「お言葉を返すようですが」と同じように慣習的配慮表現として使われている決まり文句だといえる。発話機能が異なるが、相手のおすすめなどを受け入れる控え目な姿勢の表明として、(8) の発話と同じようにネガティブ・ポライトネス表現となっている。

(10) 「Hey! Say! JUMP」の伊野尾慧 (30) が新型コロナウイルスに感染したことが 13 日、分かった。伊野尾は 6 日夜に倦怠感を感じたものの、一度も発熱することなく軽微な風邪の症状に留まっていたことと、事務所で順次実施している抗体検査を 5 日に受け、結果が陰性であったことから細心の注意を払いながら経過を観察していた。その後、念のために実施した PCR 検査で 12 日に陽性が確認されたという。現在は自宅療養しながら経過を観察している。メンバーとマネジャーは本日 PCR 検査を実施した結果、全員陰性で、濃厚接触者に該当しなかった。ジャニーズ事務所のタレント、社員にも濃厚接触者の該当者はいなかった。伊野尾は同日の木曜パーソナリティーを務めるフジテレビ「めざましテレビ」(月～金曜前 5・25) を欠席。番組冒頭、メインキャスターの三宅正治アナウンサー (57) が「さて、毎週木曜日に出演している伊野尾くんなんですが、本日は体調不良のためお休みさせていただきます」と欠席を伝えた。伊野尾のコーナー「イノ調」も休止したが、番組では伊野尾の体調の詳細な報告はなかった。

(<https://news.yahoo.co.jp/articles/3b342e71950d68e9cfba118a55645e122470432e>)

(10) の「本日は体調不良のためお休みさせていただきます」はその前後の文脈でわかるが、発話者自身すなわちメインキャスターの三宅正治アナウンサー (57) のことについての言及ではなく、同じ番組の若い同僚すなわち「Hey! Say! JUMP」の伊野尾慧 (30) の代わりにその休みを視聴者の皆様に伝える「許可求め」式の配慮表現である。「お+V マス形+させていただきます」構文は、ここでは、視聴者を高め、身内の仲間同僚を低くする用法として用いられ、ネガティブ・ポライトネス表現だと考えられる。

5. まとめ

本論文は、日本語の接辞とポライトネスとの関係を考えるため、接辞の用例を集め、接尾辞と接頭辞の用法に分け、それぞれ考察し、分析できた。まとめてみると以下のような結論が言える。

①接辞のポライトネス機能はふつう、発話のコンテキストにおいてはじめて果たすことができる。たとえば、「わがまま三昧」、「体温以上の暑さ」、「歌いまくった」「プチ贅沢しま

せんか」など。

②一部分の接辞用法は文法化の度合いが高く、慣習的ポライトネス表現（配慮表現）として使われている。「おことばを返すようですが」「おことばに甘えて」「部長はどうお考えですか？」など。

③人間には、ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスがあるから、そのようなフェイスに配慮する発話が生まれたであろう。日本語の場合、今回の接辞とポライトネスとの関係にかんする分析を通して、配慮表現は人間関係の縦の上下より横の親疎に左右される比重が大きいと考えられる。日本語はどちらかという、ウチ・ソトの文化（親疎の人間関係による言語文化）中心だと言えるであろう。今回、接辞用法とポライトネスとの関係についての考察を通して、この文化的特徴がさらに浮き彫りになってきたと思う。

注

(1) ここの下線は筆者による。以下同様。

(2) 李（2018）の「配慮表現の日中対照」にも言及があり、詳しくはそちらをご参照ください。

HIDEのこの発話はLeech（1983）の丁寧さの原理の（IV）謙遜の原則（表出型と断定型において）の「(b) 自己の非難を最大限にせよ」とも合致していると考えられる。

(3) 「お言葉ですが」の用法もまったく同じ機能を果たし、同じポライトネス・ストラテジー的表現だと言える。

参考文献

秋元美晴（2002）『日本語教師・分野別マスターシリーズよくわかる語彙』アルク

小川芳男・林大・他編集（1982）『日本語教育辞典』日本語教育学会編 大修館書店

村木新次郎（1993）「第3章現代語の語彙・語彙論」『日本語要説』（工藤浩・他著）ひつじ書房 77-105

山岡政紀編（2019）『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版

山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現』東京：明治書院。

—————（2018）『新版・日本語語用論入門——コミュニケーション理論から見た日本語』東京：明治書院。

李奇楠（2019）「第12章 慣習的配慮表現の日中対照」『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版 197-212

Brown, P. & S. C. Levinson（1987）*Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.（田中典子監訳（2011）『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社。）

G. Leech,（1983）*Principles of Pragmatics*. London: Longman.（池上嘉彦、河上誓作訳（1987）『語用論』東京：紀伊國屋書店。）

（李奇楠、北京大学、liqinan@pku.edu.cn）